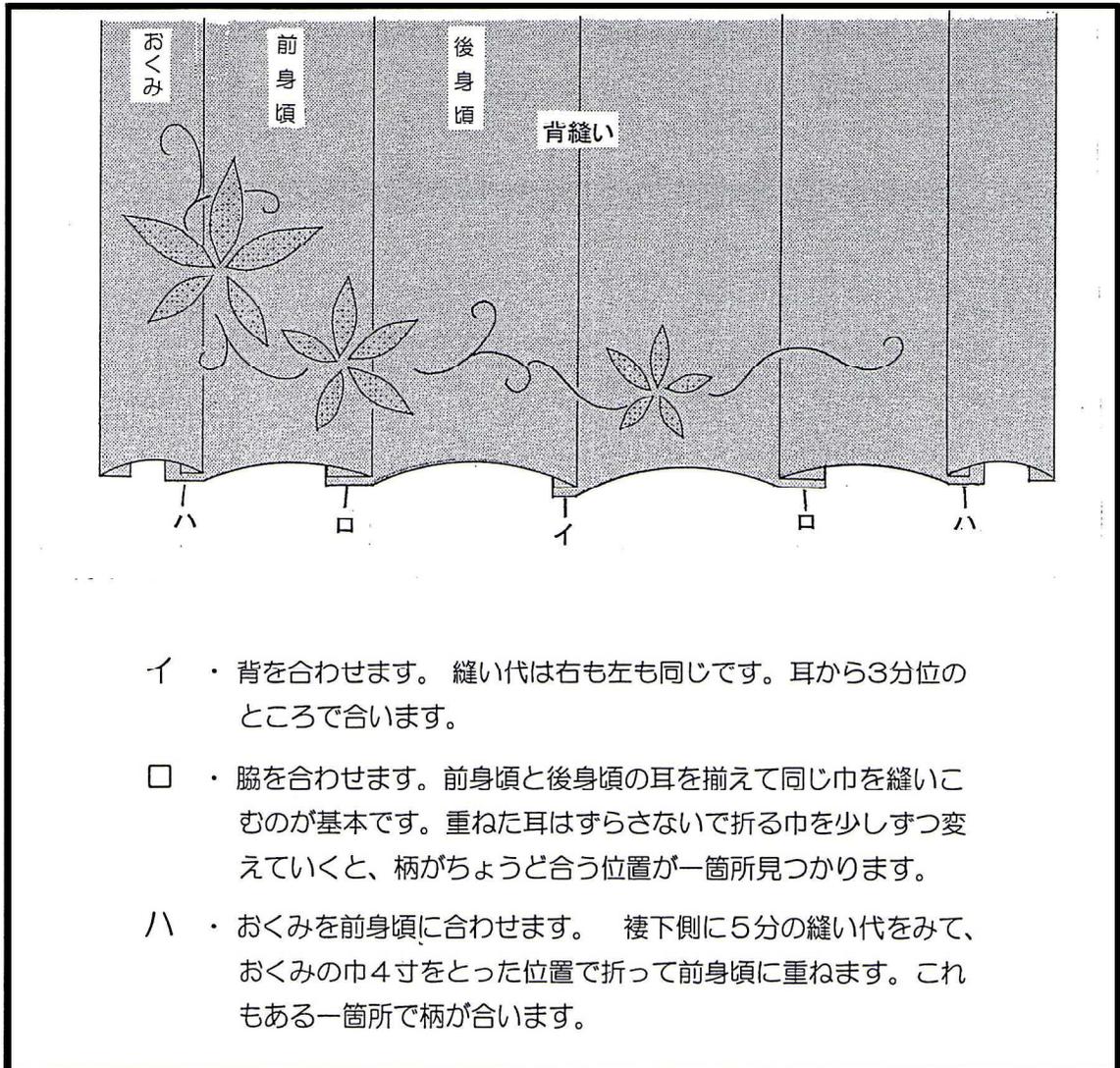


訪問着の柄あわせ①～裾模様

訪問着の柄付には様々なものがありますが、下の図のようにおくみや脇や背に柄が続くように描いているものが一般的です。では、反物の状態からこのようにどうやって柄合わせはされているのでしょうか。



この状態で前巾と後巾を測ってみますと、大概是前6寸5分、後8寸0分になります。男並寸法が図柄を描くときの基準だからです。お客様の寸法がこれより狭ければ脇をもっと深く縫いこみ、広ければ浅く縫います。その場合は脇の柄のずれが出ます。

注意； 身巾の増減は脇でおこない、おくみは動かさないのが基本ですが、布巾に余裕があれば、身頃に付く側の縫い代を浅めにして裄下面を多く縫うこともできます。これにより、おくみ付け線が身頃の中央寄りに移動しますので前巾を少し狭くすることが可能です（衿の流れに支障ない範囲に限る）。

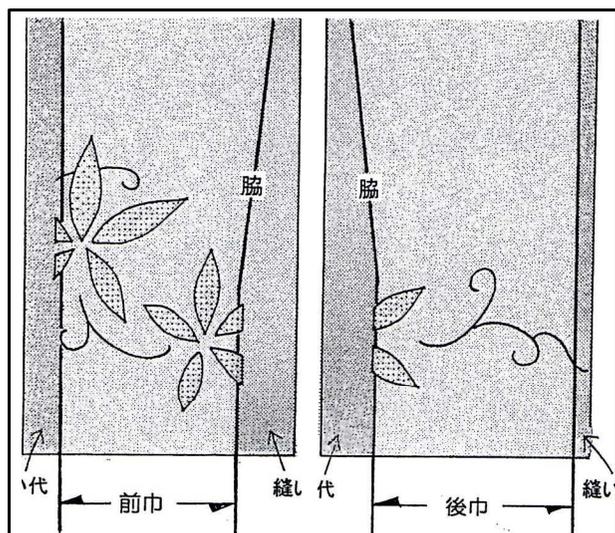
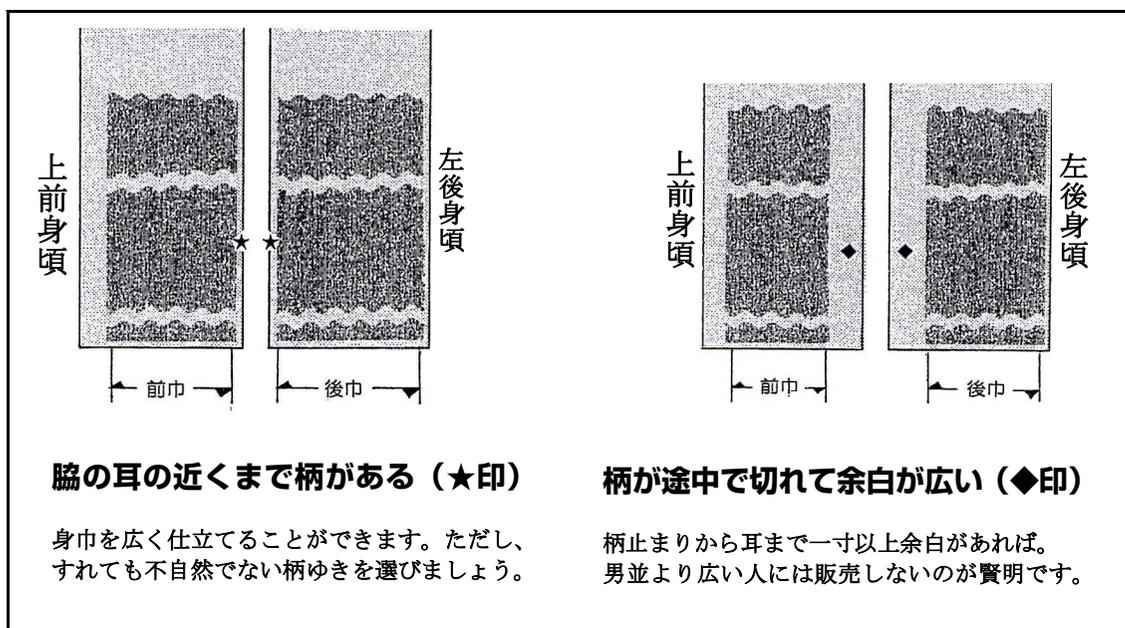
柄を合わせた寸法と依頼寸法とが僅差ならば、柄優先で仕立てるのが一般的です。

訪問着の柄あわせ②～太ったお客様

訪問着の身巾は飛び柄でもない限り、通常は柄のある範囲でしか仕立てられません。脇の縫い目にまたがって柄がある場合、基本的には「前巾6寸5分・後巾8寸0分」で仕立てるのを前提に描きます。それより広く仕立てる可能性はあっても、どこまで柄を付けるという決まりは無く、巾広く仕立てられなかったとしても欠陥品ではないのです。

ですから、身巾に合う品を選ばないとなります。

丸巻きの品は上前身頃まで解けば大方の見当はつきます。仮縫いしてあれば左脇の縫い目を広げて、奥まで柄が描かれているかを確認してください。



柄止まりで身巾が出ない場合の対処法として、脇の柄が低い位置にあるならば腰の高さで身巾が広がるように、斜めに縫うこともできます。しかし、傾斜が大きくなれば着物の形に影響しますので概ね2～3分広がり限界です。

注意；前身頃のおくみ付け側の柄合わせをするため、柄付け一杯まで前巾が出せるわけではありません。

訪問着の柄あわせ③～前後の身巾の許容範囲

訪問着の身頃は柄との兼ね合いにより、脇の縫い代の巾をあえてずらして仕立てしたり、依頼寸法そのままではなくて、若干の調整をして仕立てることがよくあります。

ケースⅠ 前巾を広く仕立てたい場合

小紋や無地など縫い目で柄を合わせる必要がない品は、身巾に応じておくみの付く位置が変わります。まず後巾を漏り、前後同じ縫い代で前身頃の脇線を決め、そこから前巾を測っておくみを付けるからです。

それに対して訪問着は柄がつながる特性上、おくみを付けられる位置は限られており、太い人も細い人もほとんど一緒です。

例えば、前巾6寸5分・後巾7寸5分のご要望で寸法どおりに仕立てをする場合、おくみ付け線を基点に前巾寸法を測ったところが脇線になりますので、脇の縫い代の巾は後ろより前が狭くなります。

注意： 縫い代の差があり過ぎる（前巾と後巾の差がとても少ない）場合は出来上がりに支障がでますので、前後で振り分けを変えて（寸法を足し引きして）つくるのが普通です。

ケースⅡ 脇柄のずれが目立つ場合

男並で柄が合う訪問着をそれ以外の寸法につくるなら、脇の柄ずれは仕方のないことです。

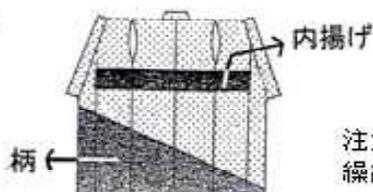
ですがこういった場合、縫う位置を少し変えることによって印象を良くすることが可能なら、依頼寸法に近い範囲で身巾を調整し柄優先で仕立てることもあります（寸法優先の指定がある場合を除く）。そのときの寸法のとり方によっては、脇の縫い代の巾が前後同じにならない場合もあります。

訪問着の柄合わせ④～斜めの柄

小紋や無地の着物の「内揚げ」は、左右の身頃を同じ量縫い込むのが基本です。これは、後で同じ長さに直せるようにです。でも、訪問着の場合は柄合わせが優先になりますので、違ってくる場合がございます。

●訪問着の柄合わせの場合、最初は、身巾を柄が合うように決めてみます（通常は前巾65、後ろ幅80です）。内揚げは、柄を描く時に身頃の丈を合わせているので、この時点では、だいたい同じになります。

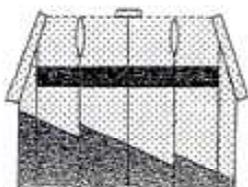
身巾の縫い込みもこの時は同じになります。



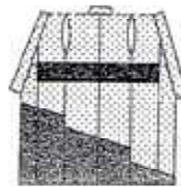
注意) 分かりやすくするために繰越揚げは省いています。

では、この状態から身巾を広げたり、詰めたりするとどうなるでしょうか。

身巾を広げる



身巾を狭める



脇柄はずれて
しまいます

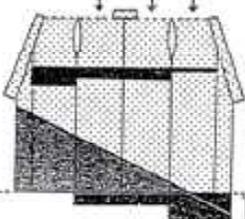
でも、高さを少し変えれば
段が揃って見良くなりそうですね。



柄のずれは、内揚げの量を変えて裾で調節します。



揚げを下ろす

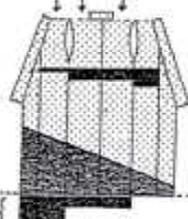


裾 残り布

柄合わせ

最後に、裾の余分な
ところを切って揃えましょう。

揚げを下ろす



裾 残り布

注意 必要以上に裾を切ると後で支障が出ますので、極端な幅の場合は脇の柄合わせは、ある程度の妥協が必要です。それに流れ（斜めにつながる線）は合わせられますが、その中にある柄はずれてしまいます。

訪問着の柄あわせ⑤～総絵羽のきもの

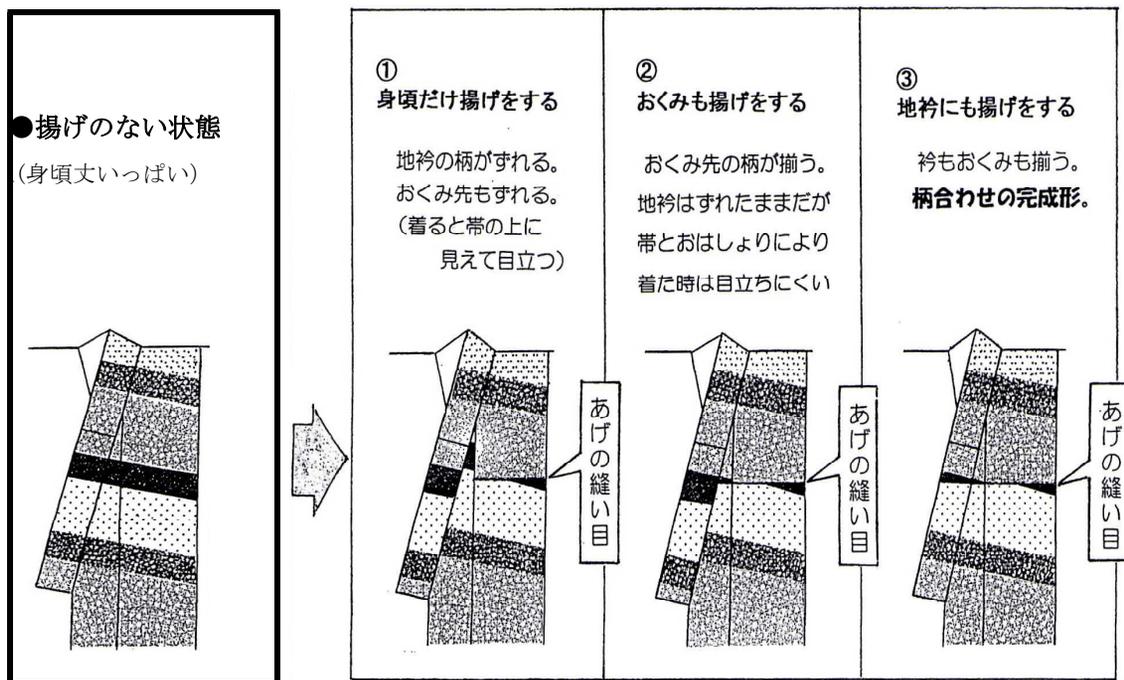
訪問着を仕立てるときも身丈をとった残りは内揚げに入れます。

訪問着は裾柄が主役ですから、身頃の丈が長いからといって裾を切り詰めてしまうことは避けます。余りはすべて内揚げに入れるのが原則です。

ところで、「内揚げ」は身頃だけにするものと思っはいませんか？ 確かに、日頃目にする着物の多くは、前身頃と後身頃だけに揚げがしてあります。これは、小紋や無地のように縫い目で柄を合わせる必要がない着物や、訪問着ならば裾に模様があつて胸回りは無地か合い口の無い柄づけ（飛び柄）の場合に用いられる方法です。

このとき、おくみ丈の余りは剣先から上の衿の中に、地衿丈の余りは衿先で裏に折り返して縫いこんでおきます。

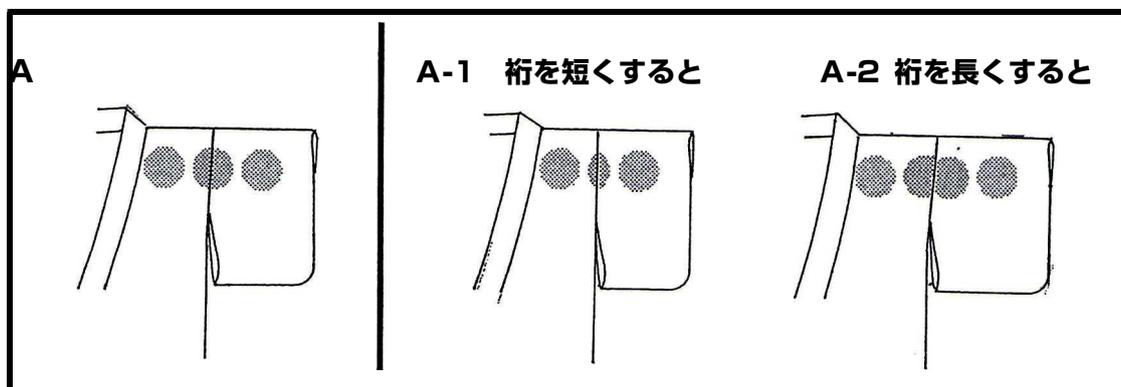
では、地衿やおくみ先にも、身頃から続いた柄がある場合はどうでしょうか。身頃に揚げをただけでは、おくみとの境で模様がずれて着ると目立ってしまいます(①)。柄につながりを持たせて美しく見せるためには、おくみや衿にも内揚げが必要になります(②と③)。



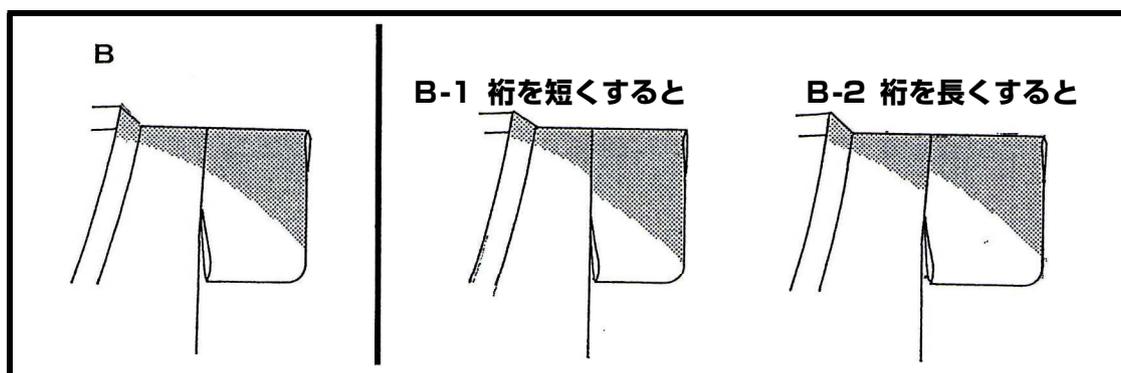
訪問着の柄あわせ⑥～桁の柄

袖から身頃へと続く柄は、桁丈によってその見え方が変わってきます。

●柄を合わせて仕立てれば(A)になるはずでも、着る人の桁によっては柄をすらし縫うしかありません。出来上がりは(A-①)や(A-②)のようになります。



●同じく(B)になるはずでも、着る人に合わないならやはりずらして仕立てますが、桁を広げたり狭めたりという【横方向】の動きだけなのに、柄が斜めだと【縦方向】にも段差が生じてしまうのです。(B-①)・(B-②)



前袖か後袖のどちらか一方だけに柄があるのなら、袖山を廻して段を揃えることも可能です。しかし、前後両方に柄がある場合は、片方を揃えともう片方めずれ幅が多くなって目立ってしまうことがあります。こうしたケースでは、双方の梢の存在感や、山を廻したときの扶の柄や底の縫込みとの兼ね合いを見ながら、いい塩梅のところで袖山を決めるのがふつうです。ですので、前後とも段を違えたままにしておくこともあります。いずれの方法も正しく、間違いではありません。

訪問着の柄あわせ⑦～衿肩明きの位置について

身丈を最大に見積もっても希望の丈にならないとき、「切り線越にして」と、要望されることがあります。切り線越と(ふつうの)揚げ線越との違いを覚えていますか？
両者の違いは**衿肩あきの位置**でした。身頃の生地を半分に折って、山を切るか、山から線越の長さだけ下がったところを切るか、の違いでした。では、訪問着のように柄の位置が決まっている着物は、どのようにして衿肩あきの位置を決めるのでしょうか。

いくつか例を挙げてみます。

○飛び柄の裾模様で、胸に柄なしの場合

⇒身頃を半分に折った山の位置に衿肩明きを切ります。

○飛び柄の裾模様で、胸にも飛び柄ありの場合

⇒胸の柄位置をみて出来上がりの肩山を決め、線越分後ろへ下がったところを衿肩明きを切ります。

○つながる柄の裾模様で、胸に柄なしの場合

⇒脇の柄を揃え、身頃を半分に折った山に衿肩明きを切ります。

柄付けの誤差で左右の身頃丈が異なることがあり、その場合は内揚げの量が左右で違って縫い上がります。

○つながる柄の裾模様で、胸に飛び柄がある場合

⇒左身頃は脇の柄を揃えて二つ折りしたところを仮の衿肩あきとみて、線り越したときの胸の柄位置を確認します。具合が悪ければ微調整して出来上がりの肩山を決め直し、線越分後ろへ下がったところに衿肩明きを切ります。
右身頃は脇の柄を揃え、身頃を半分に折った山を切るか、又は左身頃に準じた位置で切ります。

背・脇と柄を合わせますが衿肩あきから裾までの長さが前後左右で異なるのが常で、揚げの量はそれぞれ違って縫い上がります。

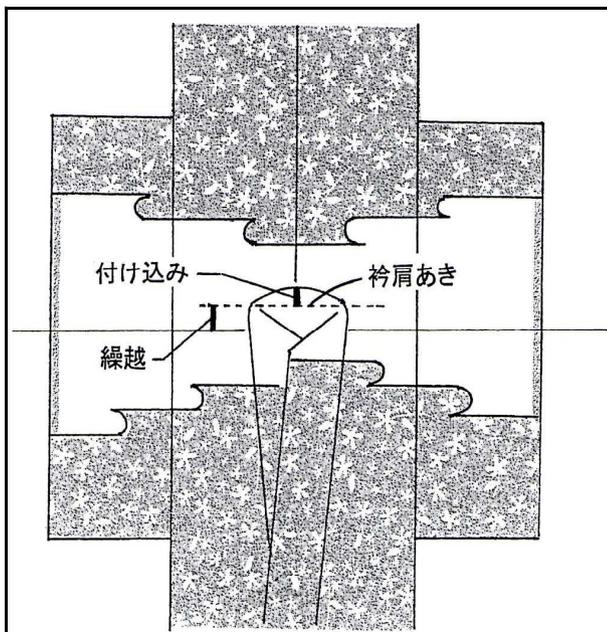
○つながる柄の裾模様、上前の胸だけに衿とでつながる柄のある場合

⇒左身頃は脇の柄を揃えて二つ折りしたところを仮の衿肩あきとみて、繰り越したときの胸と衿の柄位置と左右の共衿丈を確認します。具合が悪ければ微調整して出来上がりの肩山を決め直し、繰越分後ろへ下がったところを切ります。左身頃は胸と衿の柄位置と共衿の左右の要尺みて出来上がりの肩山を決め、繰越分後ろへ下がったところを切ります。右身頃は脇の柄を揃え、身頃を半分に折ったところを切るか、又は左身頃に準じた位置で切ります。背・脇と柄を合わせますが、衿肩あきから裾までの長さが前後左右で異なるのが常で**揚げの量がそれぞれ違って縫い上がります**

○一方付け小紋や一方付け地紋の色無地(例えば青海波の地紋)の場合

⇒柄の向きが変わるところが出来上がりの肩山になるよう、繰越分後ろに下がったところを切るのが普通です。

○つながる柄の裾模様で、 上前と下前の両方ともに衿と胸とでつながる柄がある場合



⇒内揚げから上の部分の背の柄を合わせしてから身頃のおおよその肩山のラインを決めます。

その後で共衿の長さや柄の関係から共衿の中心位置を求め、えり付けのゆるみ分などを考えて正確に肩山を決めてから繰り越し分下がった位置に衿肩あきを切る場所を特定します。

あくまでも共衿の柄が左右身頃と合う品物は、共衿が基準になりますので、

※肩山で柄の向きが変わる一方付け着物でも、共衿と身頃柄の線が繋がらないと見苦しくなるような場合は、**肩山の位置が、繰越の量によっては、ずれることがあります。**